

幼児および小学校低学年に対する 健康教育に関する一考察

—小学校1年生と2年生を対象とした意識調査より—

入谷仁士・山部真理*・松本有希**・久保昌子

A study on health education for kindergarten children and lower elementary school students

-From an attitude survey targeting first -and second- grade elementary school students-

Hitoshi Iritani, Mari Yamabe, Yuki Matsumoto, Masako Kubo

(Received October 1, 2022)

An attitude survey was conducted among the first and second grades of elementary school to obtain guidelines for early childhood health education aimed at forming a healthy daily routine in kindergarten children and lower grades of elementary school. As a result, health education for children in the lower grades of elementary school should allow the students to learn about the mechanism by which lifestyle habits affect the body, or the structure and functions of the body, rather than emphasizing that desirable lifestyle habits are necessary for maintaining and promoting health. The results suggest that children should be allowed to make the realization of the importance of lifestyle habits and their body by themselves.

Key words: Kindergarten children, Lower Elementary School Students, health education

1. はじめに

子ども達が生涯にわたって望ましい生活習慣を実践していける資質や能力を育むことは、学校教育の重要な目標の1つである。このような目標を達成するための教育活動の一つが、保健教育である。集団を対象とした保健教育には、体育保健領域（以下保健領域）、保健体育科保健分野、保健体育科科目保健のいわゆる教科保健、特別活動などを利用した保健に関する指導、総合的な学習の時間、その他関連する教科等がある。しかし教科保健や総合的な学習が実施されるのは小学校3年生からである。また、保健に関連した教科が増えるのも小学校3年からである。そのため、小学校低学年においては、特別活動が保健教育の重要な機会となる。

小学校低学年におけるこうした保健教育の現状から、保健領域の授業の可能性を探る検討も行われている¹⁻³⁾。しかし、先述したように現状において、特別活動を利用した保健に関する指導が保健教育の重要な

機会であることから、このような時間に行う保健に関する指導の充実を図る必要があると考えられる。

特別活動の時間を活用した時間などで集団を対象として実施される保健に関する指導は、児童・生徒等の実態に応じた健康課題を取り上げることができる点にその特徴があると考えられる。しかし一方で、教師が子どもに学んでもらいたいこと、子どもが学びたいこと、保護者が子どもに学んでもらいたいことをすり合わせた教育的ニーズを意識した内容を選定した実践に課題があることが指摘されている⁴⁾。また、小学校における集団を対象とした保健に関する指導の実施困難要因として、指導時間の確保が難しいことや教材研究の時間の確保が難しいことが報告されている⁵⁾。

そのため、今後このような課題を解決するためにも、小学校低学年における「望ましい生活習慣の実践意欲」、「健康やからだに関する意識」、「健康に関する認識」、さらに「保健教育に対する捉え方や学習ニーズ」を明らかにし、今後の低学年における保健教育における重要な視座を検討することが重要となると考えられる。しかし、こうした検討を行った研究はこれまであ

* 熊本市立河内小学校 ** 熊本大学教職大学院院生

まりみられない。

また、望ましい生活習慣の形成などに関わる教育活動は、小学校においてはじめて実施されるものではなく、幼児期においても実施されているものである。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説⁶⁾および幼稚園教育要領解説⁷⁾では、心身の健康に関する領域「健康」において「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」こととし、「健康な生活のリズムを身に付ける」、「自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う」ことなどを内容として示している。また、保育所保育指針解説⁸⁾では、心身の健康に関する領域「健康」において、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」とし、内容に「食事や午睡、遊びと休息など、保育所における生活のリズムが形成される」と示されている。

さらに、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説⁹⁾および保育所保育指針解説¹⁰⁾において、「小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮する必要性が示されている。また、幼稚園教育要領解説¹¹⁾においても、指導方法を工夫するなどし、連携を図る必要性があることが示されている。

一方で、幼稚園において実施される保健指導の内容は「歯・口の健康」「目・耳・鼻の健康」「生活安全」「疾病とその予防」が多い傾向にあるとの報告がみられており、実施内容に偏りがみられることが指摘されている⁵⁾。また、教材作成の困難さも指摘されている⁵⁾。

これらのことから、幼児がさらに発育発達した姿である小学校1年生および2年生の「望ましい生活習慣の実践意欲」、「からだに関する意識」、「健康に関する認識」、さらに「保健教育に対する捉え方や学習ニーズ」を明らかにすることで、健康な生活リズムの形成に向けた幼児期における健康教育の内容の充実や教材づくりにつながる指針を得ることができると考えられる。

これまで、手洗いに関する幼児の認識と手洗い行動についての検討¹²⁾が行われている。しかし幼児の発育発達後の姿である小学校低学年の意識等を捉えて、望ましい生活習慣や生活リズムを検討したものはほとんどみられない。そこで、本研究では、小学1、2年生の小学校低学年における「望ましい生活習慣の実践意欲」、「からだに関する意識」、「健康に関する認識」、さらに「保健教育に対する捉え方」および「保健教育に対する学習ニーズ」を明らかにすることを目的とした調査を実施した。

なお、小学校においては、健康について扱う教育活動を保健教育としている。しかしながら幼稚園等においては、あまりこうした名称が使われていないため、本研究においては保健教育に代わって「健康教育」と

いう名称を使うものとする。

また、幼児を対象とした領域「健康」の内容にはさまざまな内容が含まれる。しかしながら、本研究では、小学校1、2年生を対象にした望ましい生活習慣の形成に関わる健康教育の検討も目的としている。また、調査対象が小学1、2年生である。こうしたことから、本研究においては小学校における保健領域の「運動・栄養・休養」に関連した生活行動あるいは生活リズムを「望ましい生活習慣」として扱うこととする。

2. 研究方法

1) 調査時期方法と対象

A県A小学校の1年および2年生を対象として無記名自記式のアンケートを実施した。令和3年12月1日から12月15日にかけて、授業と授業の間に実施することとなっていた保健の指導の時間に、養護教諭が調査の説明を行い、実施および回収した。1年生30名、2年生38名、合計68名から回答があり（回収率100%）、68名分すべてを分析対象とした（有効回収率100%）。

2) 本研究に用いた主な調査内容について

(1) 望ましい生活習慣の実践意欲

望ましい生活習慣の実践意欲として、「自分の健康のために元気に生活しようと思う」という質問項目を設定し、回答は「とてもそう思う」、「少しはそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「ぜんぜんそう思わない」の5件法で求めた。

(2) からだに関する意識について

からだに関する意識として「自分のからだは、すごい働きがあると思う」という質問項目を設定し、回答は「とてもそう思う」、「少しはそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「ぜんぜんそう思わない」の5件法で求めた。

(3) 健康に関する認識

健康に関する認識として「早寝早起きをすると、食べ物の栄養をたくさんからだに取り入れることができると思う」という質問項目を設定し、回答は「とても大切だと思う」、「少しは大切だと思う」、「どちらともいえない」、「あまり大切だと思わない」、「ぜんぜん大切だと思わない」の5件法で求めた。また「からだをつくるためには、いろいろな食べ物の栄養が必要だと思う。」という質問項目を設定し、回答は「とてもそう思う」、「少しはそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「ぜんぜんそう思わない」の5件法で求めた。

さらに、「からだを強くするためには、運動をしたほうが良いと思う」という質問項目を設定し、回答は「と

ても元気にすごせると思う」、「少しは元気にすごせると思う」、「どちらともいえない」、「あまり元気にすごせないと思う」、「ぜんぜん元気にすごせないと思う」の5件法で求めた。加えて、「元気にすごすためには、どんなことに気をつければいいのか、わかりますか」という質問項目を設定し、回答は「とてもわかる」、「少しはわかる」、「どちらともいえない」、「あまりわからない」、「ぜんぜんわからない」の5件法で求めた。なお、質問項目によっては、質問だけでは回答しにくい、子どももいる可能性があることから選択肢をみて質問の意図がわかるようにした。

(4) 健康教育に対する捉え方

健康教育に対する捉え方として「からだについて勉強は、役に立つと思う」という質問項目を設定し、回答は「とても役に立つと思う」、「少し役に立つと思う」、「どちらともいえない」、「あまり役にたたないと思う」、「ぜんぜん役にたたないと思う」の5件法で求めた。また、「自分のからだの中が、どうなっているかわかると、もっと自分のからだを大切にできると思う」という質問項目を設定し、回答は「とても大切にできると思う」、「少しは大切にできると思う」、「どちらともいえない」、「あまり大切にできないと思う」、「ぜんぜん大切にできないと思う」の5件法で求めた。さらに、「からだや健康のことについて、もっと知りたいと思う」という質問項目を設定し、回答は「とても知りたいと思う」、「少しは知りたいと思う」、「どちらともいえない」、「あまり知りたいと思わない」、「ぜんぜん知りたいと思わない」の5件法で求めた。

(5) 健康教育における学習ニーズについて

健康教育における学習ニーズについては、自由記述で「成長や生活習慣について疑問に思うことや知りたいことなどをいくつかでもよいので書いてもらおうようにした。なお、小学校低学年の子どもが回答しやすいように、「よくねると、どんないいことがあるの?」「運動をすると、どんないいことがあるの?」の2項目を例示した。

3) 分析方法

各質問項目に対する回答の学年差の検討については、 χ^2 検定を用いることとした。また、健康教育に対するニーズについては、自由記述による27名分、69件の回答のうち、研究者4人で、健康教育で扱える質問であるもの、25名分、56件の自由記述回答を対象にすることとし、カテゴリーおよびカテゴリー抽出を行った。コロナ禍であることもあり、まず代表者がカテゴリー分類を検討した後、その結果をさらに研究者4人で分析・検討し直すといった形式をとった。

4) 倫理配慮

調査にあたっては、A小学校の校長に許可を得、児

童に調査結果を研究目的以外に使用しないこと、分析においては個人が特定されないことなどを説明し、本人が調査を拒否した場合や回答したくない質問にはこたえなくてよい旨など倫理的配慮についても説明を行い、同意を得た。

3. 結果

1) 望ましい生活7習慣の実践意欲について

望ましい生活習慣の実践意欲として、「自分の健康のために元気に生活しようと思う」という質問に対して「とてもそう思う」と回答した者は、1年生90.0%、2年生65.8%、「少しはそう思う」と回答した者は、1年生10.0%、2年生28.9%であった。学年差については期待同数が5未満のセルが多くあるなど問題もみられるが、回答にどのような偏りがみられるかを検討するために χ^2 検定を実施することとした。その結果、学年による差は認められなかった(表1、なお表中の回答欄は肯定的回答から順に「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「ややそう思わない」、「ぜんぜん思わない」で示している)。

2) からだに関する意識について

からだに関する意識として「自分のからだは、すごい働きがあると思う。」という質問に対して「とてもそう思う」と回答した者は、1年生63.3%、2年生57.9%、「少しはそう思う」と回答した者は、1年生30.0%、2年生34.2%であった。先ほどと同様に χ^2 検定を実施することとした。その結果、学年による差は認められなかった(表2、なお表中の回答欄は肯定的回答から順に「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「ややそう思わない」、「ぜんぜん思わない」で示している)。

3) 健康に関する認識について

健康に関する認識として「早寝早起きをすると、食べ物の栄養をたくさんからだに取り入れることができると思う」という質問に対し「とても大切だと思う」と回答した者は、1年生76.7%、2年生47.4%、「少し大切だと思う」と回答した者は、1年生6.7%、2年生21.1%、「どちらともいえない」と回答した者は、1年生10.0%、2年生21.1%、否定的な回答については1年生6.7%、2年生10.5%であった。学年差については、先ほどと同様に χ^2 検定を実施することとした。その結果、学年による差は認められなかった(表3、なお表中の回答欄は肯定的回答から順に「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「ややそう思わない」、「ぜんぜん思わない」で示している)。

また「からだをつくるためには、いろいろな食べ物の栄養が必要だと思う」という質問に対し「とてもそ

う思う」と回答した者は、1年生 86.7%、2年生 55.3%、「少しそう思う」と回答した者は、1年生 6.7%、2年生 36.8%であった。学年差については、先ほどと同様に χ^2 検定を実施することとした。その結果、1年生は2年生に比べ「とてもそう思う」との回答者が多く、「少しそう思う」との回答者が少ない傾向がみられた(表4, なお表中の回答欄は肯定的回答から順に「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「ややそう思わない」、「ぜんぜん思わない」で示している)。

さらに、「からだを強くするためには、運動をしたほうが良いと思う」という質問に対し「とても元気にすごせると思う」と回答した者は、1年生 96.7%、2年生 68.4%、「少し元気にすごせると思う」と回答した者は、1年生 0%、2年生 15.8%であった。学年差については、先ほどと同様に χ^2 検定を実施することとした。その結果、1年生は2年生に比べ「とてもそう思う」との回答者が多く、「少しそう思う」との回答者が少ない傾向がみられた(表5, なお表中の回答欄は肯定的回答から順に「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「ややそう思わない」、「ぜんぜん思わない」で示している)。

最後に、「元気にすごすためには、どんなことに気をつければいいのか、わかりますか」という質問に対して「とてもわかる」と回答した者は、1年生 36.7%、2年生 28.9%、「少しわかる」と回答した者は、1年生 33.3%、2年生 44.7%、「どちらともいえない」と回答した者は、1年生 10.0%、2年生 5.3%、「わからない」といった否定的回答は1年生 20.0%、2年生 21.1%であった。学年差については、先ほどと同様に χ^2 検定を実施することとした。その結果、学年による差は認められなかった(表6, なお表中の回答欄は肯定的回答から順に「とてもわかる」、「ややわかる」、「どちらともいえない」、「ややわからない」、「ぜんぜんわからない」で示している)。

4) 健康教育に対する捉え方

健康教育に対する捉え方として「からだについて勉強は、役に立つと思う」という質問に対して「とてもやくにたつと思う」と回答した者は、1年生 90.0%、2年生 65.8%、「少しやくにたつと思う」と回答した者は、1年生 6.7%、2年生 26.3%であった。先ほどと同様に χ^2 検定を実施することとした。その結果、学年による差は認められなかった(表7, なお表中の回答欄は肯定的回答から順に「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「ややそう思わない」、「ぜんぜん思わない」で示している)。

また、「自分のからだの中が、どうなっているかわかると、もっと自分のからだを大切にできると思う」

という質問に対して「とてもそう思う」と回答した者は、1年生 50.0%、2年生 44.7%、「少しはそう思う」と回答した者は、1年生 26.7%、2年生 47.4%、「どちらともいえない」と回答した者は、1年生 23.3%、2年生 2.6%であった。学年差については、先ほどと同様に χ^2 検定を実施することとした。その結果、2年生は1年生に比べ「少しそう思う」との回答者が多く、「どちらともいえない」との回答者が少ない傾向がみられた(表8, なお表中の回答欄は肯定的回答から順に「とてもできる」、「ややできる」、「どちらともいえない」、「ややできない」、「ぜんぜんできない」で示している)。

さらに、「からだや健康のことについて、もっと知りたいと思う」という質問に対して「とてもそう思う」と回答した者は、1年生 76.7%、2年生 44.7%、「少しはそう思う」と回答した者は、1年生 13.3%、2年生 39.5%であった。学年差については、先ほどと同様に χ^2 検定を実施することとした。その結果、学年による差は認められなかった(表9, なお表中の回答欄は肯定的回答から順に「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「ややそう思わない」、「ぜんぜん思わない」で示している)。

表1. 自分の健康のために元気に生活しようと思う(%)

	とても そう思う	少しは そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	ぜんぜん 思わない
1年 N=30	27(90.0)	3(10.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
2年 N=38	25(65.8)	11(28.9)	1(2.6)	1(2.6)	0(0.0)

$\chi^2(3) = 5.78$ n.s.

表2. 自分のからだは、すごい働きがあると思う(%)

	とても そう思う	少しは そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	ぜんぜん 思わない
1年 N=30	19(63.3)	9(30.0)	1(3.3)	0(0.0)	1(3.3)
2年 N=38	22(57.9)	13(34.2)	1(2.6)	1(2.6)	1(2.6)

$\chi^2(4) = 1.02$ n.s.

表3. 寝早起きをする、食べ物の栄養をたくさんからだに取り入れることができると思う(%)

	とても そう思う	少しは そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	ぜんぜん 思わない
1年 N=30	23(76.7)	2(6.7)	3(10.0)	2(6.7)	0(0.0)
2年 N=38	18(47.4)	8(21.1)	8(21.1)	3(7.9)	1(2.6)

$\chi^2(4) = 6.83$ n.s.

表4. からだをつくるためには色々な食べ物の栄養が必要だと思う(%)

	とても そう思う	少しは そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	ぜんぜん 思わない
1年 N=30	26** (86.7)	2** (6.7)	1(3.3)	1(3.3)	0(0.0)
2年 N=38	21** (55.3)	14** (36.8)	2(5.3)	1(2.6)	0(0.0)

$\chi^2(3) = 9.04$ $p < .05$ 残差: ** $p < .01$

表5. からだを強くするためには運動をしたほうがいいと思う(%)

	とても そう思う	少しは そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	ぜんぜん 思わない
1年 N=30	29** (96.7)	0** (0.0)	1(3.3)	0(0.0)	0(0.0)
2年 N=38	26** (68.4)	6** (15.8)	3(7.9)	3(7.9)	0(0.0)

$\chi^2(3) = 9.35$ $p < .05$ 残差: * $p < .05$ ** $p < .01$

表6. 元気にすごすためには、どんなことに気をつければいいのか、わかりますか(%)

	とても わかる	少しは わかる	どちらとも いえない	あまりわ からない	ぜんぜん わからない
1年 N=30	11(36.7)	10(33.3)	3(10.0)	5(16.7)	1(3.3)
2年 N=38	11(28.9)	17(44.7)	2(5.3)	6(15.8)	2(5.3)

$\chi^2(4) = 1.51$ n.s.

表7. からだについて勉強は、役に立つと思う(%)

	とても そう思う	少しは そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	ぜんぜん 思わない
1年 N=30	27(90.0)	2(6.7)	0(0.0)	1(3.3)	0(0.0)
2年 N=38	25(65.8)	10(26.3)	2(5.3)	1(2.6)	0(0.0)

$\chi^2(3) = 5.99$ n.s.

表8. 自分のからだの中が、どうなっているかわかると、もっと自分のからだを大切にできると思う(%)

	とても できる	少し できる	どちらとも いえない	あまり できない	ぜんぜん 思わない
1年 N=30	15(50.0)	8(26.7)*	7(23.3)**	0(0.0)	0(0.0)
2年 N=38	17(44.7)	18(47.4)*	1(2.6)**	1(2.6)	1(2.6)

$\chi^2(4) = 9.66$ $p < .05$ 残差: * $p < .05$ ** $p < .01$

表9. からだや健康のことについて、もっと知りたいと思う(%)

	とても そう思う	少しは そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	ぜんぜん 思わない
1年 N=30	23(76.7)	4(13.3)	1(3.3)	2(6.7)	0(0.0)
2年 N=38	17(44.7)	15(39.5)	1(2.6)	2(5.3)	3(7.9)

$\chi^2(4) = 9.45$ n.s.

5) 健康教育に対するニーズ

健康教育に対するニーズについては、「成長や生活習慣について疑問に思うことや知りたいことなどを書いてください(いくつでも書いていいです)」と質問した自由記述による22名分の回答をカテゴリーに分類した。

その結果、「体の構造や機能(32件)」「生活習慣と体の関係(10件)」「体に起こる現象の理由(9件)」「生活の方法(2件)」「健康そのものの価値(1件)」「男女の機能の違い(1件)」「体と病気(1件)」の7つのカテゴリーが抽出された(表10)。

表10. 健康教育に対するニーズ(自由記述のカテゴリー分類)

カテゴリー	主な記述
体の構造や機能(32件)	どうして骨は動くの 何でまつげがあるの 何で頭は大切だろう
生活習慣と体の関係(10件)	早く寝ると背が伸びるのですか 野菜を食べるとどんないいことがあるか 知りたいです 何で牛乳を飲むと骨が強くなるのか
体に起こる現象の理由(9件)	どうして自分は背が高くなっていくの 寝ているとき体はどんなことをするのか どうしてしゃっくりが出るの
生活の方法(2件)	元気に過ごすためには何をすればいいか 体重ってどうやったら増えるんですか
健康そのものの価値(1件)	体や健康はどんないいことがあるのか
体と病気(1件)	病気になったらどこに菌が溜まるの
男女の機能の違い(1件)	何で男は赤ちゃんを産まないで女だけ産むの

4. 考察

1) 小学校低学年および幼児に対する健康教育の課題について

「望ましい生活習慣の実践意欲」に関する設問である「自分の健康のために元気に生活しようと思う」および「からだに関する意識」に関する設問である「自分のからだは、すごい働きがあると思う」という質問に対する小学1, 2年生の回答には、学年差は認められず、いずれも肯定的な回答が9割を超えるものであり、「どちらもいえない」あるいは否定的な回答はほとんどみられなかった。しかし一方で、「健康に関する認識」として「早寝早起きをすると、食べ物の栄養をたくさんからだに取り入れることができると思う」という質問に対し「どちらもいえない」と回答した者は、1年生10.0%、2年生21.1%、否定的な回答については1年生6.7%、2年生10.5%であった。また、「からだをつくるためには、いろいろな食べ物の栄養が必要だと思う」という質問に対し「とてもそう思う」と回答した者は、1年生86.7%、2年生55.3%、「から

だを強くするためには、運動をしたほうが良いと思う」という質問に対し「とても元気にすごせると思う」と回答した者は、1年生 96.7%，2年生 68.4%，となっており、「どちらともいえない」や否定的回答はほとんどみられないものの、2年生は、1年生に比べ「とてもそう思う」との回答者が少ない傾向がみられている。さらに、「元気にすごすためには、どんなことに気をつければいいのか、わかりますか」という質問に対して「とてもわかる」と回答した者は、1年生 36.7%，2年生 28.9%，「少しわかる」と回答した者は、1年生 33.3%，2年生 44.7%と、他の質問と比べ、1年生および2年生ともに、肯定的回答の割合が減り、「どちらともいえない」あるいは「わからない」といった否定的回答の割合が増えているという結果であった。

今回の「望ましい生活習慣の実践意欲」や「からだに関する意識」について肯定的意識を持つ者の割合が高いものの、「健康に関する認識」についての肯定的回答割合がそれらより低くなっていること、質問の仕方を変えた「元気にすごすためには、どんなことに気をつければいいのか、わかりますか」という質問に対して「とてもわかる」との肯定的回答割合がさらにこれらを下回るような結果は、保護者や小学校入学以前に身につけた知識が表層的なものであったことを示唆しているものと考えられる。また、1年生の方が2年生に比べ「健康に関する認識」に対する最も望ましい回答の割合が低くなっている傾向がみられたことについては、単に1年生の肯定的回答を選択しやすい可能性があること、あるいは1年生の方が2年生に比べて、こうした質問に対して、より質問を表層的に読みとり、これまでの表層的なレベルで「よく知っている」と考えたことからこうした学年差がみられた可能性も考えられる。

いずれにせよ、小学校入学以前或いは1年生における健康教育で身につけた知識がからだや健康にしっかりと理解をともなったものでない可能性がある。そのため、今後、幼児期或いは小学校低学年における健康教育においては、子ども達の発達段階に合わせつつ、子ども達がしっかりとからだや健康に関する学びを通じた認識を獲得できるように展開されていくことが重要であると思われる。

2) 小学校低学年および幼児期における健康教育における内容の充実や教材づくりについて

「成長や生活習慣について疑問に思うことや知りたいこと」について自由記述の回答をカテゴリー化した結果、「体の構造や機能 (32件)」「生活習慣と体の関係 (10件)」「体に起こる現象の理由 (9件)」「生活の方法 (2件)」「男女の機能の違い (1件)」「体と病気

(1件)」の7つのカテゴリーが抽出された。

これらのうち生活習慣等と強い結びつきを持ち、多くの回答数が見られたものは、「生活習慣と体の関係」の10件であった。また「生活の方法」は2件「健康そのものの価値」は1件であった。

このような結果は、子どもは、健康のために望ましい生活習慣をした方がいいことは、保護者あるいは幼稚園等において学んできていることを示しているものと思われる。しかし、「望ましい生活習慣が体にどのような影響をもたらすのか」といったことを、表層的にしか学んできておらず、その行動が、体にどのようなメカニズムで影響するのかなどを納得できるような学びが必要なことを示唆しているものと思われる。

また、「成長や生活習慣について疑問に思うことや知りたいこと」について自由記述の回答をカテゴリー化した結果では、「体の構造や機能 (32件)」というカテゴリーが抽出され、こうした結果は、体のつくり、体がどうなっているのかといったことを子どもたちももっとしっかり理解することを望んでいることを表していると思われる。先述したその行動が、体にどのようなメカニズムで影響するのかなどを納得できるような学びをするためにも、こうした体そのものごとをしっかりと理解できるような学びが重要となる。濱田ら¹²⁾は幼児が正しい手洗いを身につけるためには、手洗いという行動からの基本的動作技術は必要であるが、手洗いにおける洗い残しに関する認識を育めるような指導が必要であることを指摘している。こうした報告や本研究の結果は、「望ましい生活習慣を実践しましょう」が強調されるようなしつけ的な学びではなく、その行動が、体にどのようなメカニズムで影響するのか、体の機能や働きがどうなっているのかなどを子ども達の発達段階に考慮したうえで、学べるようにすることの重要性を示唆していると思われる。

今後の小学校低学年、幼児を対象とした健康教育においては、健康の保持増進のためには望ましい生活習慣が必要であるということ強調するのではなく、その生活習慣が体にどのようなメカニズムで影響するのかといったこと、或いは体の構造や機能を学べるようにすることにより、生活習慣の重要性や体の大切さを子どもたち自らが実感できるようにしていく必要があると思われる。こういったことを基本的な視座としていくことが重要であると思われる。こうした視座を念頭において子どもたちの実態を意識しつつ、教師が子どもに学んでもらいたい内容を選定し、教材を検討し、保健教育を実践していくことが、今後の低学年および幼児を対象とした健康教育においては重要であると思われる。

5. 今後の課題

非常に限られた調査対象者の回答を検討していること、調査対象者数が少ないことから、統計的分析においても、また自由記述の分析においても、十分な検討ができていない。そのため、今後さらに対象を広げ、対象数を増やした検討が必要であると思われる。

6. 文献

- 1) 民部田真由子, 安斎ひとみ, 仲彩佐他, 小学校低学年の保健学習についての研究-学習プログラム試案と教材の検討-, 弘前大学教育学部紀要 107, 101-111, 2012
- 2) 面澤和子, アメリカと日本の保健教育の比較-小学校低学年の米国保健教育スタンダード (NHES), 保健教育分析ツール (HECAT) と HealthSmart の検討-, 弘前大学教育学部紀要 111, 129-138, 2014
- 3) 小林真衣, 小浜明, フィンランドの小学校低学年における保健学習, 日本体育学会大会予稿集 66, 342, 2015
- 4) 山田浩平, 橋本みや子, 井本陽子他, 養護教諭が行う保健指導の実情, 愛知教育大学研究報告, 教育科学編 63, 103-109, 2014
- 5) 加納亜紀, 上村弘子, 田嶋八千代他, 養護教諭が行う保健指導の現状: 個別及び集団の保健指導の校種間比較, 学校保健研究 57(6), 323-333, 2016
- 6) 内閣府, 文部科学省, 厚生労働省, 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 (平成 26 年 12 月公示), 138-155, 2015
- 7) 文部科学省, 幼稚園教育要領解説 (平成 30 年 2 月公示), pp. 136-156
- 8) 厚生労働省, 保育所保育指針解説 (平成 30 年 2 月公示), pp. 134-143
- 9) 同上 6) 264-266
- 10) 同上 8) 96-298
- 11) 同上 7) pp. 84-85
- 12) 濱田祥子, 舩田奈々美, 加納章他, 幼児の手洗いに対する認識, 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究 7, 123-132, 2021